慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	留年学生に関する臨床的考察
Sub Title	A clinical study of repeaters
Author	小川, 芳子(Ogawa, Yoshiko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1976
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.21 (1976.) ,p.82- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000021-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 21 (1976)

留年学生に関する臨床的考察

A Clinical Study of Repeaters

小川芳子
YOSHIKO OGAWA

One of the serious social problems in present day Japan is that repeaters or students who are not promoted are increasing in number. This is a reseach report on the actual state of the repeaters in a women's college.

In this college the repeaters last year amounted 2% of all the students, and the real number had not shown an increase for five years. Only 5 percent of the students or so had had this experience and this percentage was considerably lower, compared with that of other colleges or universities. It is certain that they showed some features different from those of the average of normal students, but it doesn't necessarily follow that they were defeatists. As is naturally supposed, their response to the experence was varied. Some learned much from their mental struggle due to it, while others seemed not to have been affected by it.

Generally speaking, it can be safely said that the important point in approaching such students is how the repeaters spend their free time and how they conduct their student life during the academical year. So, if they are led to spend their time creatively, they will find advantage in repeating and make it a basis for their further development.

(1) 研究の目的

留年という言葉は戦後，新制大学になってから使われるようになった。最初は学生自ら積極的に卒業延期をするために使われたが，次第に所定の単位未修得による進学不可能や同様の理由による卒業不能現象のごとき消極的意味も含むようになった。

留年と一口に云っても実態は複雑でこれを把える視点[1]も，学生問題とか，教育制度の問題とか，或は広く戦後の社会変動を問題にする立場とかいろいろあるが，人数だけは確実に増加しているという報告[2]が多い。総合大学では昭和30年頃には5%程度だが，40年頃には10%位，その後も増加の一途をたどっている。

文化系の大学の学生が選択性の高い状況の中で留年という現象も多くなるという実態は当然とも思われるが，将来に対してかなり限定された薬科大学生で，しかも女子のみの単科大学ではどうであろうか，彼女達も又受験競争を勝ち抜いてきた現代っ子であり，その中で進級出来なかった。しなかった両者を含めて，これまでも学内で何かと問題にされることの多い留年生と語り，考えてみることも意義があるのではと思いこの研究にとり組んだ。同時に今年度開設した学生々活相談室をより開かれた。親しみやすい機関として活動するための一助としたいことも研究目的の1つである。

(2) 研究対象者と方法

本学の学生数は約850名，国家試験の合格率は全国で1．2位を競い，女子だけという特質もさることながらその学風は堅実で略50年の歴史を持つ。

薬学教育は基礎知識の積み重ねからなされなければならないという教育方針から，各学年ごとに9単位未了となると留年という方式をとっている。

最近5年間の留年者実数は次の通りである。

昭和	46 年 度	18 名	49 年 度	20 名
	47 年 度	20 名	50 年 度	16 名
	48 年 度	16 名		

毎年2～3％の留年率であり，全大学の統計から見れば非常に低い。

昭和51年4月現在留年中，過去の留年経験者が休学者を含めて41名在籍しているが，外国留学の為など明白な休学者3名を除き38名，全体からみると約5％の学生を研究対象者とした。

調査方法

① 学校へ提出の連絡表を資料として，社会的属性の統計的観察をする。

② カウンセリング的立場で面接，好きなことを語ってもらう中で，留年生自身が意識している面での留年を把える。

③ 留年生自身の同意が得られた人々に，[3] ソンディ・テスト，[4] TAT テストを実施，性格的特徴を把える。

(3) 留年要因の統計的観察

一般学生と留年生との間に統計的に観察して相違があると思われたのは，次の7つの点に於てである。

① 女の子1人で育った者が多い。

女の子が1人という場合，一般に甘やかしと過干渉の中で依存的に育てられることが多く，大学に入って自立したいという気持を持つが実力が伴わず，依存したくない気持との間に葛藤が生じ，勉強に真剣に取り組めず留年への移行の一因となると思われる。

② 自宅外通学者が多いこと。

受験生活からの解放感に，親元から離れた自立感，自由さに対して自分を主体的に律してゆく訓練不足で，生活をコントロールしてゆく術がわからない。まして理科系の単科大学というのは時間的にかなり厳しい制約を強いられ，大学という憧れが現実と一致せず不満を募らせ単位不足となる。

③ 母親が有職者である場合が多い。

父親との職業に関する相関は殆んどみられなかったが，母親が職業を持っている者が比較的多く，その職種は医師・薬剤師を始め，社会的に認められた地位で意欲的に活動している親が多かった。これは同性として自己の理想のモデリングとして利用できる反面，実力が伴わない劣等感，あせりから不満を増大させ勉強に力をそそげず，留年への要因の1つとなりうるであろう。

④ 浪人生活を経験していること。

② と同様の意味ずけが考えられるが，受験生活が長かっただけに解放感も拡大される。

1年次の留年に多い要因である。

⑤ 友達が少ないこと。

青年期の学生達にとって自己の殻にとじこもることなく行動してゆけることは，人間形成の中で重要な意味を持つであろう。

⑥　大学の選択理由

留年群の人々は自分の意志で入学したというより，親とか先生とかに勧められて入った或いは他大学（特に医学部が多い）の受験に失敗して仕方なく入った，そしてそのことを自己の中で受容出来ず絶えず不満に思っている。

当然のこととして主体性の欠除を生み勉強に身の入らぬ結果となるといえよう。

⑦　要求水準が高いこと

各人の持つ可能性に対して，自分はこうあるべきという要求水準の高さが留年群に顕著であるように思えた為，ソンディ・テストのP＋反応を1つの指標として検討，前景像に於てP＋50%以上を示したものが多かった。

ソンディ・テストに於けるPファクター[5]は実存領域の拡大・拡張への衝動として現わされる。一方では環境の力の拡大即ち他者拡大として，他方では自らの自我実存の拡大即ち本来の自我拡大として現われてくる。

このファクターの協同作用により，人間は人間らしく自我理想を形成し成長してゆくのであるが，他のファクターとの関連能力からも個人個人の発展をとげるものである。

この様に考える時，拡大要求ばかりが大きいことは健全な自我発達とはいえない問題を含んでいると思われるし，留年要因の1つともなろう。

ただ今回は反応回数の50%以上にP＋を示した人数で比較したが，これは処理しやすい便宜性からで本来は反応の内容から検討すべきであり，そうすることによりここに表わした数値より多くの留年群に於ける要求水準の高さが認められることは確実である。

以上7つの要因が一般学生と留年生との間にしめる割合は Table I のごとくである。

Table I を Fig 1 図とする。外側に留年生，内側に一般学生の各要因をしめる割合を示し両者間の広い程有意差が大きい。下半円上には両者に差の殆んどない因子を記入した。

	留　年　生	一般学生
①　女の子1人で育った	78.4%	44.9%
②　自宅外通学者	63.2	49.9
③　母親が有職者	40.0	23.0
④　浪人生活を経験	44.7	18.6
⑤　友達が少い	75.0	60.0
⑥　大学の選択理由に自分以外の意志が強い	68.0	37.0
⑦　要求水準が高い	76.0	60.0

Table I　　（一般学生は2年生を対象群とする）

（4）　留年要因の考察

研究対象者38名との面接結果から，本人が意識している面で留年原因をまとめると次のようであった。

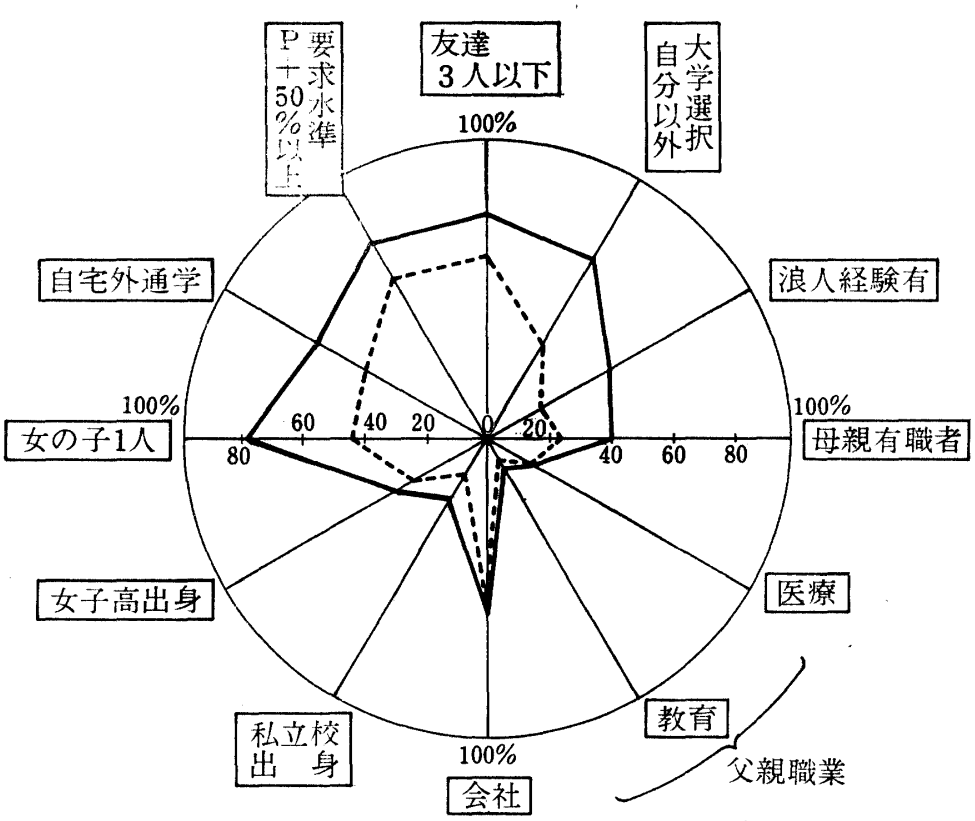

Fig. 1 留 年 生 要 因

———留 年 生
------一般学生
が各要因をしめる割合
中心を0％ 円周上を
100％とする。

病気だから仕方なかった	7名（17％）
能力不足	5名（12％）
生活環境への不適応	7名（17％）
不勉強	15名（37％）
考えたことない	1名（2％）
不明	6名（15％）

（合計が38名を超えるのは2回以上留年している人がいるため）

広い意味からみれば，全部が不勉強だったからといえるかもしれないが，ここでの不勉強とは特に本人が他のことに把われて勉強出来なかったというものである。

生活環境への不適応というのは1年次の留年に多く，大学への憧れで入ったところ，高校の授業と大差なくみえ，不満を持つ。他の大学に入った友達などがうらやましく自分がみじめでやる気がしない，そうこうしているうちに授業内容が難しくなりついてゆけない。友達も出来ずに1年が過ぎてしまう。人によっては神経症になるとか胃腸病になるとか逃避的意味あいを持つ病気となり，仕方がなかったと述べることになる。これに対し能力不足とか，他のことに興味の対象がうつって不勉強というのは2年以上の留年に多い。

病気になった，生活不適応と本人が述べるが，青年期の学生の多くは一時的には生活に不適応を感じることも多く，又病気を持ちながら進級している例は多い。ではどこで留年する人との違いが出てくるのであろうか。前章で一般学生との統計的相違を整理し7つの要因を見つけ出した。しかしこれは絶対的なものではなく数量的に一般学生ではこの要因3個以内が多いが，留年生は5個程度という違いがある。要因の多いものに性格的特徴が加わり，本人の主体的統合が保てず勉強に自己を向わせられなかったから留年に至ったと思われる。

いいかえるなら自己を学校生活に充分適応させられなかったからであろう。適応面からロジャース（Rogers, C. R.）らは臨床的経験から「現実の自己像」と「理想の自己像」の差異が個人の適応のダイナミックスに大きい関連を持ち，神経症の初期のクライエントは現実の自己と理想の自己間に著しいギャップを持つが，治療が進むに従ってギャップが少なくなると述べている。

性格的特徴をこの自己像と理想像の把え方という面で簡単な調査をしてみたのが Fig 2 である。これを加藤隆勝氏[6]の「理想像と自己像に対する大学生の調査」と比較してみると，加藤氏の調査では現実と理想がかけてはなれている人は，現実の自己を内省的・自己否定が強いとみている。その点で現実の自己に好意的でないが，他方自己の批判力・独立心・創造力がかなり高いという。高い理想を追うものとして所謂内面的な思索への関心はかなり強いことがうかがわれる。又このグループの人達は社交的なことがらに劣等感を持ちやすいのが特徴とされる。自分は社会的・対人的な適応がうまくないと考える傾向が著しい。従って理想像には現実の自己に欠ける対人性・社会性を身につけたいという強い希望が現われている。

これらの特徴に近いものを Fig 2 の留年群にみることが出来る，「気まま，ねばりがない，消極的」などの項目が一般学生より多く，「気にしない・神経質・感情的」など自己否定的な項目が圧倒的に多い。

これに対し理想と現実が比較的同質的で一致するグループをみると，一般に現実の自己の特性として誠実・親切・礼儀正しいなどをあげるといわれるが，Fig 2 においても一般学生群では素直・明朗・慎重・愛想のある方などに多くの比率が示された。対照者が4年生の為就職を意識し理想像に近く記入されたという面は多少あるかもしれないが，現実像と理想像が留年群よりずっと近く，現実の自己を信頼し受容している様子がわかる。現実像においても理想像においても対人或いは対社会的関係を重視し，自分もそれに必要な望ましい特性を備えていると肯定している。従って前者のグループとは対象的に内面的な世界に対する関心はさほど強くない。自己の現状に満足しやすい「自己受容と社会生活への適応に価値をおく態度」であるともいえよう。

現実適応という面に限れば，現実と理想の差は少ない方が望ましいといえるかもしれないが，根本的には機械的な大小の差ではなく差異の型であり，現実と理想をどのように統合してゆこうとするのかという個人の意欲的な態度こそ大切であり，差が少な過ぎるのも問題であるといわれるようになってきた。適応障害を起さない限り自己の限実と理想の距離を認め，理想に向って自己をおし進める姿こそすぐれて青年的なものといえるのではなかろうか。

このように青年を把えてみる時，留年理由として能力がないと答えているものもあるが厳しい入学試験を通ってきた人々に能力がないとは思われない。現実の自己をよく見，理想に向って自己をおし進める方向が，勉強・学校への適応という面にむけられなかったからにすぎないと思われる。

5） 留年中とその後

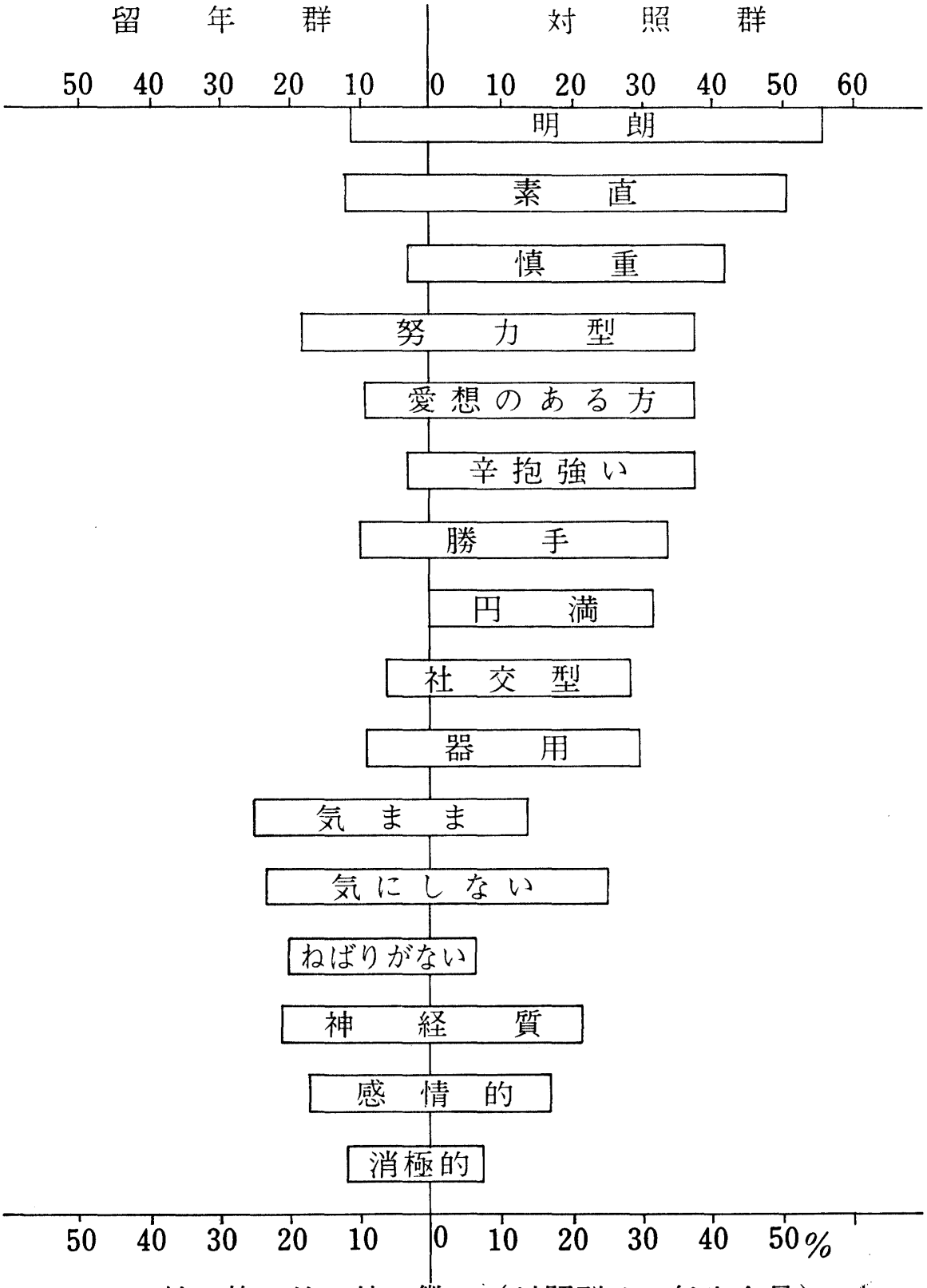

Fig 2 性格的特徴 (対照群は4年生全員)

次に留年することが学生達にどんな影響を与えているかを，留年した人々との面接から探ってみる。

留年直後の気持は「ホッとした」と肯定的に受けとめている人が1人だけいたが他は，やっぱり，仕方がない。病気だから当然。驚いたと述べながら本来なら留年したくなかったという気持を秘めながら，事実を一生懸命自己のものに受け入れなければと努力している姿が見られた。

3ケ月後の彼女達は，将来に対して不安を持ちながら現在一般学生より時間的余裕があるということに価値を求め，それを如何に使うか苦慮している様に見えた。

さらに1年後進級して，留年してよかったと思う，勉強になったと留年したことを意義あることと認めている人が60%に達している。ではどういう人が肯定的に受けとめられるかをみると，余暇時間を如何に過したかにつきるようであった。クラブ活動が出来た，アルバイトが出来た，1年生の場合は新1年生と同じ気持で生活を自分自身で調整できたなどと述べられたが，これらを統合して底辺にあるものは自分で考え「留年という経験を自己の中に受け入れられた人」が留年してよかったという答を返してくるのではないだろうか。

同じように留年中の生活をアルバイトをした，クラブ活動をしていたと述べながら失敗だったと答える人もいる彼女達は留年という事実を自己の中に受け入れられず，外からの規制によってのみ動かされていたので，自分で行動したという満足感が得られず敗北感のみが残ったのだろう。

本人は失敗といっても客観的にみると他人或いは自己を見る眼を開きかけている途上だったり，人間的にある成長を遂げながら本人はそれに気ずいていない場合もあるので，一概に失敗とか成功とかの判断の出来ないことは勿論である。

6） 留年の影響一つの視点

以上の結果から，留年することが将来に対して彼女達にどんな影響を与えると考えられるかを留年経験が活かされるかどうかという点から分類してみる。

a）留年経験を活かしている或はこれから活かすと思われる人　　10名（30%）

この範疇に入れた人は，本人自身留年してよかったと述べ，面接して本当によかったなと客観的にも確かめられるような人間的成長遂げていると思われる人で，事例として次章で，自分自身で歩いてゆく大人としての行動がとれるようになったAさんを紹介する。

人間的成長ということは学者間で種々の定義ずけがなされているが，河合氏[7]の「母性社会日本の永遠の少年たち」の中でInitiationの問題をとりあげているのが興味深いのでここに紹介してみると「近代世界の特色の1つは，深い意義を持つイニシエーション儀礼が消滅し去ったことだ。われわれ近代人は常に進歩し成長する人間社会という世界観を持つようになったが，これによって失ったものは大きかった。つまり未開社会のように，ある個人が根元的体験を持って大人になったことを自覚することが非常に困難になった」というものであるが，このイニシエーション儀礼による根元的体験にかわりえるものを，ある人々は留年から進級への過程の中で体得し，ある人は大人として，又ある人は薬学生としての自覚を持てるようになったのではないだろうか。

b）留年経験を活かしてはないが，特に障害ともなっていないと思われる人　　15名（46%）

病気とかクラブ活動（運動部が多い）が負担となって留年したような人がこの中に含まれることが多い，自己自身を病気などを楯として保護し，自己の内部には留年という事実も入りえな

い。何の変化も起さないので苦痛も少ない，割合としては一番多く事例としてBさんを紹介する。

c）現在の一時期かもしれないが障害となっている様にみえる人　　8名（24%）

ここに入る人は少くとも現在の一時期の状態が，留年によって障害を受けているように思われ，今後の時間の経過でa）やb）に組み入れられるかもしれない。大人への道程として青年期の波が他の人より激しいだけかもしれない。例えば面接を拒否したIさんの態度は「私は普通の共薬生と同じだと思っていますが何か違ったところあるのですか」と開きなおり，「私はそこへ行く必要は全然感じませんからゆきません」という彼女自身の中にこそ，留年を非常に意識し，他の共薬生と強調するあたりには大きな囚われを感ぜざるを得ない。障害となっている現在ももう過去の範疇でa）への転換の出発点となっているのかもしれないし，そうあってほしいと願わずにはいられない。

一応便宜的に3つの範疇への分類を試みてみたが，全般的に見れば経済的にも現在は勿論将来に対してもかなり安定性の高い集団内における事象であり，成長に対する可能性の素質も高く，女性であるということは留年期間中の生活を容易にしている面もあると思われるが，男性との比較検討の資料がないため今回は出来なかった。

7）事例研究

a）2回の留年で成長したAさん

Aさんの留年要素は次の5つが考えられる。

1. 下宿生活をしている。
2. 友達が少ない。（連絡表には1人も書いてないので聞いてみると，中学時代から仲の良い友達が人だけいるという。）
3. 浪人生活を1年経験している。
4. 大学への選択理由は，中学時代から父親や親戚の人に薬学がよいと云われ，自分では特に望んだわけではないが，特にやりたいということもなかったから。
5. ソンディ・テストの前景ではP＋，P0で必しもP＋が高いとはいえないが，背景では非常に高い，これは外に現わす態度はかなり統制されているが，内に秘める要求水準の高さ，を示している。

Aさんは弟・妹1人ずつの長女として父親から特に可愛がられて育ってきた。このことは女の子1人という要素に近い意味を持つものではないだろうか。自分を1番理解してくれるのは父親であり，父親の側にいることが安定していられることからか小さい時からどちらかというと男性の友達の方が多かった。女性とのつき合いは淡々として表面的だからかえって気まずくなることもない。

現在のAさんは地味な感じで自分の思ったことをきちんとまとめて相手に伝える成熟した大人の印象を与える。だがここに至るまで大学生活6年目という苦労は彼女にしかわからないものだろうが，面接により1部私なりに理解したことを記す。

Aさんは家の人特に父親の希望から薬学に入ったので，浪人してようやく入れた時は父親が非常に喜んで下宿探しや何やかやと世話をやいてくれた。彼女自身は浪人生活から抜け出せたという喜びだけだった。だから学校が始まって仕方がないから出かけてゆく，下宿では時をかまわず声を掛けてくる隣人が腹立たしく都会生活全般になじめなかった。しかし経済的理由もあり父親

のことを考えると簡単に引越しをするわけにはいかなかった。

薬学に対して身を入れる気もせずなんとなくフラフラと過し，当然の結果として留年した。

母親には世間体を気にして口やかましく云われたが，父親は自分のことは自分で責任を持ってよい年だから自分の好きなようにしなさいといわれとても嬉しかった。

下宿生活にもようやく慣れてきたので新1年生と同じ気持でもう1度やりなおす決心をした。新1年と同じといっても時間的にはかなり自由があったので何かやりたいと，好きだった演劇を始めた。アルバイトなども適当にやり結構楽しく3年までいったが，3年から4年への進級が出来なかった。3年だけの未了単位というより2，3年合計で9単位以上が残ってしまった。

この留年宣告はすごいショックであった。まさか落ちるとは夢々思わなかったのである。自分は今まで何をしてきたのであろうか，能力のなさ等々自己の殻の中でもがき苦しみ退学届を書いた。

両親の態度は1年次の時と基本的には同じだが母親からは退学するように云われた。

明日は退学届を出しにゆくという夜半に，急にハッと目がさめたように自分は今まで演劇，演劇といったが何の為に演劇を求めたのだろうか，絵もやりたいと常々思っている。これら演劇や絵そのものを求めていたろうか。いやそうではないそれ等を通して人間とのふれ合いを求めていたのだ。演劇や絵の中に求めていた人間関係が薬学を志す人々或いは身近かな世間一般の人々の間に求められないだろうか，こう考え出した時，自分の身のまわりで励ましてくれたり勇気ずけてくれた友達や先生の顔が走馬燈のように浮かび，自分にも理解してくれる人々がいるのだという実感が湧き，いてもたってもいられなくなった。翌朝早く母親に「今度こそちゃんとやりますからもう1度だけやらせて下さい」と泣き泣き何度も頭を下げた。

それからのAさんは演劇も絵も卒業するまではやるまいと決心，薬学の中に喜びを見つけようと努力した。その気になると今までつまらないと思っていた授業の中にも結構楽しいこともあるし，卒業したら薬学関係の仕事をしながら趣味として絵をやりたいという希望にささえられ，勉強にも人間関係にもよく適応していけるようになり無事卒業した。

テストの結果などから彼女のパーソナリティをみると，彼女自身は，自分は努力型で気にしない，ねばりのない，気まま，勝気な性格という。どちらかというと器用で，身体的には小さい時は弱かったが現在はすごく丈夫，日常生活の細々したことは好きだから，慣れてきた下宿生活そのものは苦にならない。アルバイトなどもビル掃除とか店員とか肉体的職種を選んでやっている。

ソンディ・テストに於てm反応に極度の＋が多く＋!!!1回，＋!!6回，＋!3回，＋1回で，これに加えてd－が多いところから察せられるのは，衝動過圧を伴う固執傾向が病的に高い，執着欲求に於ける過緊張を知らされると解釈できる。云いかえれば依存的，しがみつきたい欲求が強いその反面素直であるということになるようだが，これらのことは演劇や絵に自ら人間関係を求めていたのだと自覚したことでもわかるように，人間に対する執着の強さが読みとれる。

テストではこれ以外でも背景で攻撃欲求，前景でカイン欲求と心(シン)の強さ内に秘めた活力のようなものを感じた。

彼女の留年によって得た素晴しさは，自己の行動に対する自覚，自分自身を知りコントロール出来る成熟さを持ち得たことであり，1つのイニシエーションをはたしたといえよう。

これをTATテストの中で読みとってみると，どのカードでも一応話の結末はプラスになっているし，全体の流れのよさは現在の彼女のコントロールの良さを示しているといえよう。

内面に於ては゛カード3BMでの激しい黄色の表出とか攻撃的な面を時おりのぞかせること，登場人物に対し人間的感情交流を見せない話が多いこと，カード4では女性に積極的行動をさせない抑圧された面をのぞかせている。カード13MFでふしだらな感じが嫌い，カード1や2など日常生活そのままなのが好きということは，自分の現在の生活に着実に足をつけ，自信を持ち，楽しみを見つけている様子がわかる一方，裸のつき合いの出来ないもう1つの面を持っているようだ。男女関係を語る時も彼女自身だけがいて，1歩離れたところに男性がいる。まだ熟しきっていない彼女の女性性ともいえよう。彼女自身は父親が1番の理解者というが，本当の理解者としての認識があるのだろうか，父親に可愛がってほしい依存したいが，本心を出して裸のつき合いの出来なさが時に憎しみ感情或は無関心さとなってゆくのではなかろうか。

彼女自身ある程度自覚し，自分自身を知ろうと努力しているので今後，社会参加の中で或いは結婚生活の中で一時的に苦しみの体験が訪れるかもしれないが，それを乗り越え成熟してゆく力，可能性を秘めていると思われる。

b）病気で留年したBさん。

Bさんは血尿から腎臓病とわかり入院，退院後も自宅治療と半年近くを療養のために費し留年，という例で1番留年を意識していないグループの1人である。

留年自体はしょうがない，当然のこととしていながら，1年病気することによっての遅れ，特に女性としてのあせりを感じ自分の行動に対して，自分の属する社会への不安が大きい。青年期特有の自己に対する信頼のなさが不安となり社会への反感となっているともいえようが，彼女自身の主観性の強い物の見方，素直になれない性格からきているものと思われる。

経済的に恵まれて，両親からも愛され明るい家庭に育ってきたことから，自我はかなりしっかりしているので，現在は何か混沌とした不安があっても，いずれ統合された大人への成長をしてゆく可能性は充分持っていると思う。

留年要因を前例どおり記すと，

1. 兄弟は弟1人，女の子1人で両親特に父親に可愛がられて育つ。
2. 1人で下宿生活
3. 大学への選択理由は，両親が女性でも何か職業を身につけるようにと勧められたから。自分は文化系にゆきたかったが，職につくとなると東大とか早大ぐらいでないとダメだと思われるし無理と思った。医科にゆこうと思ったが受験に失敗。
4. 1年浪人生活をしている。
5. 母親は医師で自宅開業，精力的活動家。

彼女自身が語る父親像はとても柔しい母親以上であり傷つきやすいので防衛反応として時に冷たくすることもあるという。母親像はしっかりした何でも出来る人，頼れる人，でも自分はああいうしっかりした人にはならない，いやなれない。

TATテストからさらに彼女の認識する両親像を探ると，

母親……知的で働きものしっかりしているという安定感を持つ一方，陰の部分で激しい競走心，攻撃性を秘めている。

父親……一見温厚で紳士的であるが，目的のためには手段を選ばずという冷たいところがある。

女性の方がたくましく知的，男性に頼らずとも生きてゆける強さを持ち苦しくても安定してい

る。ただ知的でない女性に対する軽侮が見られ知的偏重ともいえよう。

ソンディ・テストに見られる現在の性格はd＋・m±が多いことは鬱感情が非常に強くとり越し苦労することが多いのであろう。

同じことがTATでも，細部にわたって説明書きを規定しなければ気がすまない完全癖があり，とり越し苦労と同じ心の機制の現われであろう。この結果として当然のことだが将来への展望など物語としての一貫性を欠くところがある，物事をマクロ的視点から眺めることが苦手であろう。

以上のような性格を持つBさんは3年次で留年している，本人が自覚する理由は勿論病気であり，仕方がないと思っている。現在でも疲労から具合悪くなるので無理の出来ない身体だという。

知的でしっかりした母親に安定感を与えられると共に，自分はそうなれないという不十全感は，大学へ入る時の気持を今だに受け入れられていないこと，それが現在の生活，将来に対しても薬学に対する不安として現わしている。薬局に行けば商品としての薬を売却するだけ，病院に行けば医師・看護婦より臨床的知識少く，立場の弱さに憤慨すると共に非常に不安，現在の生活に対する不満も沢山あるという，不満がないというのは異常ではないか，例えば空気の汚ないことだって不満であるという，ではこれら沢山の不満を解消する努力をしているかと思うとそれはしない。入学理由を自己のものとして認められないが一方，自分の本当の道は文化系と進めるかというとそれもしない。文化系に行った人がうらやましかったのは学生時代だけで同級生達は殆んど卒業しているわけだが卒業してしまうと結婚相手のことばかりで幻滅を感じたという。

これらの点から彼女は対社会的形式の完成に重点をおき，内面的充実に価値を求めない態度がわかる。このことは共薬生全般にもいえることで彼女もその中の一員であり顕著だというだけかもしれない。内面に対することは常に斜めにかまえ直面させない，面接中にも感じたがTATでは登場人物を映画の中，外国人など距離をおいたところに求めるところでは特に強く感じた。この特徴は生活全般にわたって心配，イライラの原因になり，他人から見ると取り越し苦労と見える混沌とした状態に落ち入るのではなかろうか。そしてある程度まで不安状態が高まると病気という逃避をすると見られないだろうか。

この様な生活を続けてゆくBさんにとって留年という程度の刺激では，これ以上崩れることはないが，これを機に進歩するということも期待出来ないといえよう。

自分の可能性をのばしてゆく自我への信頼は強いものがあるので長い年月での間に少しずつ目ざめる期待はもてる。

Bさんと同じ範疇に入れられる人々は，留年しても仕方ない，しょうがないとする病気或いはクラブ活動などに熱中したという理由ずけを持っている。留年中の過し方は病気の治療などと未了科目の勉強などを当然のことと処理し自分から積極的過し方を探そうとはしない。友達関係にも特に変化はみられず，留年したのは自分自身の責任とは感じないから，自ら返りみる，内省する必要は感じないのである。

留年する人数全体からみると1番多く，これらの人々へのアプローチの仕方は，いたずらに必要以上の刺激を与え進歩することを望むより，自我の強さに期待し，自分で長い年月の間に自己実現への道を見つける様に，本人自身が問題を意識し誰かを必要だと感じた時に役立てる環境だけをいつも用意しておくことが必要だと思う。

8) まとめ

社会的増加の一途をたどっているといわれる留年現象を，女子だけの本学々生を調査対象として実態を調べたところ，現在留年中は2％程度，経験者を含めても5％程度であり，過去5年以上にわたり実数の増加は認められず，他大学から比べると非常に少い。しかし1人1人と逢って話をしてみると，一般学生と違ったいくつかの特徴があった。

留年したからマイナスというより必しも自ら選んだ留年でなくても，留年したことを悩んだ為に人間的成長の基盤としえた人，或は何ら影響を受けていない様に見える人など種々興味深いものがあった。

たとえ留年を活かし得たとしても，その肉親に課せられる経済的負担は大きい。又中には退学してゆくものもあり，出来るなら留年せずに進級，或いは退学するなら早い時期にその可能性をみ極め導くことが出来れば尚一層学生達に有意義であろう。その為に第2章での留年要因の統計的観察が役立つのではないかと思われる。

一方留年してしまった学生達への一般的アプローチとして云えることは，余暇時間を如何にして使うかということであり，主体的に時間を使い生活出来るように向けることが，留年したことを人間形成の一助となしえることだと思われる。換言すればそれだけ恵まれた学生群であるともいえよう。

〔注・参考文献〕

1) 浜島　朗,「現代社会と青年層」現代青年論　有斐閣双書；辻　悟,「家庭の平和が留年を生む」　文芸春秋 Vol. 45, No. 9 (1967)；井上　俊「青年の文化と生活意識」社会学評論 Vol. 22, No. 2 (1971)；細木　照敏,「留年者と大学粉争」保健の科学（杏林書院）Vol. 14, No. 5.

2) 石谷　清幹,「大学に於ける大量留年問題の現状」自然 Vol. 21, No. 10 (1966)；小野　周, 自然 Vol. 21, No. 11 (1966)；「東京大学に於ける留年問題」；京都大学学生部,「学生の適応異常に関する調査研究」—留年に関する—調査，学生部紀要 Vol. 3 (1968)；久保　良敏,「学生の適応度測定に関する研究」広島大学教養部紀要, Vol. 3 (1966) 他

3) Szondi test 投影法心理テスト（人格診断法）の1種で，実験衝動診断法ともいわれる。

4) Thematic apperception test 投影法人格検査の1種で，主題（絵画）統覚法と訳される。

5) L・ソンディ著　佐竹　隆三訳「実験衝動診断法」日本出版貿易株式会社

6) 加藤　隆勝「青年の自己像」誠信書房

7) 河井　隼雄「母性社会日本の永遠の少年たち」中央公論 Vol. 4 (1975) 通過儀礼については，Eisenstadt, OP. cit., pp. p31～32；m. meed, "Coming of Age in Samoa" 1928 etc.「生と再生」M・エリアーデ　堀　一朗訳　東京大学出版会